



障害福祉現場で働く職員の 育ちと集団化

特集にあたって

白石正久

大学の社会福祉専門職養成課程で働く教員は、卒業生が福祉職を選択すること、そしてその職場で長く働きつづけることの難しさを、例外なく実感していることだろう。そこにある障壁は何か。さらに、社会福祉とは無縁な労働にあった人々が、壮年期になって福祉現場に入ることも少なくない。彼らは何を求めて転職し、福祉実践に何を見出しているのだろうか。

その関心から、障害福祉の職員の「育ち」をテーマとする本号は編集された。大人である職員の「育ち」を用語とすることに抵抗がないわけではない。しかし糸賀一雄は、「この子らを世の光に」と言ったとき、「世の光」は子どもだけが発するのではなく職員もまた「世の光」であることを含意し、子どもとの「共感の世界」のなかで職員が発達する姿を歓喜と期待をもって記述していた。「育ち」とは、職員の人間的発達のこととしたい。

しかし糸賀の時代から50年余、本誌の深谷論文が示す通り、福祉労働者は新自由主義下の市場原理、競争原理に対して、それを内面化し、分断されて、同僚とともに実践を創る集団化がますます困難になっている。さらに非正規労働者の増加、賃金・労働条件や社会的承認の不十分さは、「がんばっているのに、どんどんしんどくなる」という実感と将来への不安を強いる。それは、職場の人間関係の「しんどさ」に転化し収れんしていく。長い時間のなかで信頼しあえるようになった職員が、ある日とつぜんのように職場を去っていく現実、障害のある人や家族を悲しませる。そのことは本誌の報告でリアルに語られている。

峰島論文は、それに抗するように職員の自己形成を援助してきた、自身も参加する実践の報告である。理念、そこから発する既成の支援方法などと、一人ひとりの職員の思いや志向は整合するとは限らない。個人間の相異も当然のことである。違いを認めあえる関係性を大切に、個人の試行錯誤と気づき、その共有から自己形成を進めていくことの大切さが提案されている。理念の確かさこそが職員の意識と技能に反映し、それを形づくる基盤であると考えがちだが、職員は自らの労働、同僚関係、そこでの矛盾と葛藤、他者と自己への認識の変化の積み重ねのなかで、理念も技能も長い時間をかけて主体的につかみ取っていく。

市場原理による社会福祉と社会福祉労働の商品化によって労働者は歴史的に拡大したが、賃金・労働条件は抑制され、労働の意味と価値から遠ざけられていく。そのとき職員は、階級関係を引き写した社会福祉政策と労働者の矛盾を、自らの「しんどさ」の背景として必ずしも認識していない。その限られた視野のために、労働者の発達の契機であるべき失敗や試行錯誤、その支えと共同の関係であるべき同僚が、「しんどさ」という反対物に転化していく。こういった社会の「しくみ」について学びあえる機会が必要ではないか。

仲間とつながりながら自由な意思によって学んでいく学習機会の保障、社会福祉労働のための社会変革の基礎理論の構築、労働組合運動の意義の共有などのために、発達の権利の保障を目的とする全障研のような研究運動が担うべき役割は、さらに自覚されてよいであろう。（しらいし まさひさ）